
【矛盾と矛盾を重ねた先】

胡蝶愛生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【矛盾と矛盾を重ねた先】

【Nコード】

N9937T

【作者名】

胡蝶愛生

【あらすじ】

夢にまで見た大総統の地位。現大総統よりその椅子が譲られるとき、マスタングは決意する。名実ともに補佐官のホークアイを自分のものにすると言うことを。公私ともに彼女に支えてもらいたいと願うマスタングの思いと、補佐官としての顔を張り付けるホークアイの思いが執務室でぶつかる。本音の中に含まれる矛盾。矛盾の中に含まれる本音。長年上司と補佐官と言う関係だった男女が選ぶ道とは？

(前書き)

最終回の内容及び捏造要素が御座います。

また、パーフェクトガイドブック2に記載されているホークアイとグラマンの血縁関係、作者の別作品「【固い覚悟と小さな願い、そして、叶えてはならない夢】」の内容を前提としております。

「……マスターグ大将、閣下」

それは、今までに聞いたことがない声だった。

わたしが知る彼女の声とは、常に凜凜しく、時に優しく、まれに甘い。場合によっては例外もあるが、これほどまでに緊張や恐怖を帯びた声を、わたしは今までに聞いたことがない。

だからこそ、上記のどれにも属さない彼女の声に内心驚きはした。しかし、それ以上にわたしが原因であることを十二分に理解していたため、わたしに出来たのは自分に苦笑を向けることだけだった。

終業時刻はとうに過ぎており、午前中に馬鹿騒ぎをした部下たちは早早に帰っている。今ごろは、突然決まった引越に慌てながらも穏やかな時間を過ごしていることだろう。つまり、余程のことがない限り、今この執務室を訪れる人間はいないと言うことだ。

「なぜですか」

怒りか悲しみか、否、恐らくはその両方なのだろう。彼女の声が、わずかに震える。

「なぜ、わたしが今回の人事異動に含まれてなかったのですか」

夜の窓は、室内を鏡のように映し出す。執務用の机の向こう側で立つ彼女は、滅多に見ることがない複雑な表情を浮かべていた。

時はさかのぼること、数時間前。わたしは、執務室に部下を集め、次の人事異動についての発表をした。普段ならば、書面で知らせるか、さもなければ彼女に代理を頼んで適当に済ませていたのだが、いかせん今回はそのようにするわけにはいかなかった。他で

もない、わたしの昇進がそこに含まれていたからだ。

「そろそろ余生つてものを味わってみたくなっただよね」

先日。わたしにとっては元上司でもあり、彼女にとっては唯一の血縁者でもある現大統領閣下より、内密に連絡を受けた。

わたしが行っている政策の都合上、こちらのほうから連絡を取ることとは何度かあったが、逆に向こうから受け取ることとは一度もなかった。だからこそ、知らせを聞いたときは、驚愕した。

内容は、ただ一つ。次、要するに今回の人事異動で、大統領の座をわたしに譲る、と。

「流石のきみも、いい加減に座つてみたいでしょう？ 大統領の椅子」

電話先で、閣下はそうおちゃらけてみせたが、真意が他にあることをわたしは知っている。

最近、わたしが管轄する東部を中心に、イシュヴァールの暴動に関する運動が激しくなっている。イシュヴァール殲滅戦の責任を誰が取るのか。彼たちイシュヴァール人は、それを声高に欲求しているのだ。

元はと言えばイシュヴァール殲滅戦は、人造人間たちが画策していたことの一つだったので、唯一の生き残りとも言えることが出来る。セリムを差し出せば一番手っ取り早いのかも知れないのだろうが、今もなお人望厚い元大統領夫人の手前、そのようなことは出来ない。仮にそのようにしたとしても、なんとも後味が悪い。何より、実際に現場で動いていたのは紛れもない我我軍人なのだ。そう考えると、やはり軍人の誰かが責任を負わなければならないことになる。

恐らく、閣下は危惧したのだろう。わたしにとっては不名誉ながらイシュヴァールの英雄と言う功績を持ち、なおかつ次期大統領候

補に名を連ねているこのロイ＝マスタングに、運動の矛先が向けられることを。

だからこそ、そのようなことに巻き込まれる前に、閣下はわたしを運動の中心地でもある東部から引き離そうとしたのだ。理由は簡単。わたしに有事があれば、静まりかけている後継者争いがぶり返し、大きな混乱を招く。そしてそれ以上に、閣下の唯一の孫娘がとんでもない行動に出るだろうと言うことは、火を見るよりも明らかだ。

自惚れになるかも知れないが、わたしを可愛がってくれている閣下への今までの借りを返すことも考慮し、わたしはこの話に乗った。政策の進行具合と軍部に属していられる残留年数を計算すると、乗らざるを得なかった、と言ったほうが正しいのかも知れないが。

以上の事情から、閣下から前倒しでその情報を手にしたわたしは、直前まで人事について閣下と交渉し、今日、正式にこのことを伝えたのだ。

そして、今に至る。

「わたしを副官から外してどうなさるおつもりなのですか。あの子の約束を、あなたは破棄すると言つのですか！」

「違う」

語尾を荒くする彼女を、一言でなだめる。彼女と知り合ってから何十年と歳月が流れているのだ、彼女を操ることなどわたしにとつては最早朝飯前も同然。

案の定、彼女はぐつと言葉を詰まらせる。反抗出来ない自分を責める表情。嗚呼。二人きりになると、態度や表情が多彩になると知つたのはいつのころだっただろうか。

兎にも角にも、機会は今しかない。脳が訴える。逃せば、二度と来はしない。わたしには、どうしても彼女に伝えたいことがあるのだから。

「なあ、リザ。きみは、わたしを守ることが出来るか」

断られることは、既に分かっている。馬鹿の一つ覚えのように繰り返しても、彼女は絶対に旗色の良い返事はしない。

「どのような状況下でも、どのような場所からでも、きみはわたしを守ることが出来るか。わたしを撃ち殺すことが、出来るか」

わたしが突然投げた問いに、しばらく戸惑った雰囲気さらしていた彼女は、しかし意味を理解すると当たり前だと言わんばかりに首肯した。躊躇する様子などは、一切ない。まあ、今さら否定などされても困るのだが。

少しばかり開けていたカーテンを引き、有限の鏡を閉ざす。くるりと体を反転し、彼女の正面へと向き直れば、おびえを含んだ瞳がわたしを見る。

言葉は、呆気なくわたしの口から滑り出た。

「なら、これからはわたしの後ろではなく、隣に立つてくれないか」

訪れる沈黙。発言した後に、必要な言葉が抜けていたことに気付く。はっと我に返ると、最初はきょとんとしていた彼女が、次の瞬間これ以上はないと言うほどに目を大きく開いた。間髪を容れずに声を上げる。

「くだらないことを仰らないで下さい！　そもそも、結婚しないと明言してたではありませんか」

言葉が足りなかったことは素直に認めよう。そのように解釈してしまうのも致し方がない。しかし普通、決死の覚悟で口にした一言

をくだらないと一蹴するだろうか。流石のわたしも、これには落ち込む。取り敢えず、言葉足らずとは言え、本当に伝えたいことは違うとは言え、筋金入りに鈍感な彼女が遠回しな今の台詞の意味を理解しただけでもすごいと思うことにしよう。そもその基準が低いのは、長年の付き合いによる結果だ。

「勿論、する気はないよ。ただ、歴代の大統領よりも若いと自負してる分、ファーストレイがないと言うのは、流石に寂しくてな」
「それだけが理由ならば、是非他を当たって下さい！ あなたならば、選り取り見取りで……え？」

かみ付くように言葉を返した彼女が、不意に言葉を切った。顔を固まらせ、ぱちぱちと瞬きを繰り返す。そして、小首を傾け、少しばかり躊躇する様子で一言。

「言ってることが、矛盾してませんか？」

「いや？」

彼女の一言に考えようとする素振りも見せずに答えれば、彼女は言いあぐねるように口をぱくぱくとさせる。

確かに、わたしが言った内容には彼女が言った通りの矛盾がある。無論、その矛盾は故意で口にしたことだ。言葉尻ばかりを捕らえてくるお歴々の将官たちと長年渡り合ってきたのだ、言葉の扱い方にはある程度の自信がある。そのわたしが、馬鹿みたいに明確な言葉の間違いを犯すようなことがあるわけもない。

恐らく彼女もそれを承知しているからこそ、わざわざ確認を取ってからわたしの言葉の真意を見付けだそうとしているのだろう。仮面のように張り付いた無表情が、何よりも証拠だ。

やがて、彼女は何かを悟ったのだろう。唐突に深いため息をこぼす。

「……一つ、質問しても宜しいでしょうか？」

顔を上げた彼女の眼差しには、射るだけで殺すことが出来るような鋭さがあった。背筋が若干寒くなつたわたしは、押し切られるように首肯する。

一切の冗談も許さないような冷たい声音で、彼女はわたしに問いかける。

「それは、誰のためですか」

それは、予期せぬ質問だった。わたしは、弾かれたように彼女の顔を凝視した。

「あなたが口にしたその言葉は、一体誰のためですか。国のためですか。国民のためですか」

矢継ぎ早に質問を浴びす彼女。ここで少しでもわたしが返答を間違えれば、彼女はわたしを殺す。本能的に、そう思った。

同時に、彼女が何を言いたいのかを察する。

わたしと彼女との間で、出会ったときからずっと育まれてきた情愛や恋情を始め、男女の関係だと言う以上、性欲や、果ては憎悪まで、挙げれば切りがない情の数数。その情の最果てにたどり着くためだけに、この言葉を口にするのは認めない。彼女は、それを言いたいのだ。

もっと簡単な言葉で表現するのならば、個人的な理由は受け付けない、と言ったところだろうか。いやはや、全くもって彼女らしいならば、わたしは彼女の二枚も三枚も上手で行こう。理由が分かった今、彼女の視線は最早怖くはない。

「最終的には、国のため、国民のためになるつもりだ」
「と仰いますと?」

あくまでも補佐官としての姿勢を崩さない彼女の腕を徐に引き、彼女から抗議される前に、抱き寄せたその耳元でわたしはささやく。

「この話をきみが受け入れれば、この先、仕事を真面目にこなすことを約束するよ。そうすれば、ほら、将来的には国のため、国民のためになるだろう?」

今の自分はきつと意地の悪い表情を浮かべているのだろうな、と鏡を見ずとも分析が出来てしまう自分に図らずとも苦笑い。調子に乗ったまま、彼女の耳に息を吹きかけ、ちゅっと唇を寄せれば、耳を真っ赤にした彼女が羞恥心を隠すように、

「仕事を真面目に取り組むのは当然のことです!」

と可愛らしく怒った。その余りにも可愛らしい怒り方にわたしは思わず彼女の顔を覗き込めば、彼女は赤くなつた表情をわたしから背けながら、小さな声で言った。

「……本当、結婚するよりもたちが悪い」

咄嗟に意味が理解出来ず、先とは一転、怪訝な顔をするわたしに、彼女はだって、と前置きをしてから続ける。

「だって、正式に入籍するわけでもなければ一緒に暮らすわけでもない、勿論年齢の都合上子どもだって無理なのに、あなたはわたしを大総統夫人として公表するのでしょうか? 国民をだますことになりますよ。それに! 何なのですかあの条件は。わたしが了承しな

ければ、あなた、大總統になった途端に仕事放棄して議会から追出される気満満ではありませんか！」

徐徐に高揚とした様子で発言する彼女の迫力に押され、わたしは彼女を抱き込んでいることも忘れ、逃げるように片足をすつと引いた。その拍子に、やんわりとわたしの腕から脱出した彼女は、後退さったわたしを追うように執務用の机の向こう側から身を乗り出す。この行動が大変格好悪いと自覚しているからなのか、言い訳のように言葉を述べるわたしの声は、いささか見苦しいものがあつた。

「だ、だから、そうならないように、その……きみに」
「わたしに、何を？」

鸚鵡返しのように尋ねる彼女の声が、冗談を抜きに怖い。嗚呼、先ほどのわたしの威勢の良さはどこへと消えたのだ。彼女の頬の赤みも、いつの間にか綺麗さっぱりと消えているではないか。

「こ、公私……ともに」
「別段、今と何も変わらないように思いますが？」
「そうではない！」
「では、どうと？ わたしの肩書が変更されるだけではありませんか？」

あつと言う間に形勢が逆転してからと言うもの、彼女の追及には遠慮がない。このまま問答を続けていけば、とてつもない地雷を踏みそうになることを予感する。それは最早、確信とも変換出来るだろう。機嫌を損ねた場合の本気の彼女は、わたしが言うのも何だが、正直わたし以上にたちが悪い。

どうにかしてこの状況から切り抜けようと思えるわたしは、厳しい視線で静かに問う彼女から逃げるように、つい、こう言ってしまう

った。

「これからのこの国の繁栄のためには、きみには補佐官ではなく別の立場で、別の役目でわたしを支えてもらいたい。拒むのは許さん。

つべこべ言わずについてこい！」

女性へ告白をするには一番相応しくはないだろう命令口調。多忙ゆえに最近控えているが、かつて数多の浮名を流すわたしもあろうものが、この重要な場面でまたもや失敗を犯す羽目になるうとは。咄嗟に胸の内を嘲笑のような乾いた笑みをこぼす。どうにも、彼女の前では何事も上手く行かないような気がする。

と、現実から目を反らし逃避すること数秒。わたしを思考の海から現実へと引き戻したのは、あるうことか、彼女の柔らかい声だった。

「……最初から、そう言えば宜しいものを」

相変わらず目は厳しい色をたたえているが、そのかんばせに浮かぶ彼女の表情はどこか満足した様子だった。

「あなたがわたしに答えを任せた時点で間違っていることにお気付き下さい。わたしはあなたの補佐官です。あなたの命令がない限り、あなたにとって不利益になるものは根底から取り除く、それがわたしの仕事です。そのわたしが、わたしと言う存在の立ち位置を変えることがあなたへの不利益になると判断すれば、どれほどうれしい申し出だろうと断るのは当然のことではありませんか。分かりますか？」

彼女が使つにしているのは難しい言い回し。しかし、かつてお歴々の將軍から回ってきた書類の文面に比べれば、かなり易しい内容だ。

「なのにあなたは、やることなすこと遠回しなことばかり。あなたが一言、わたしに命じれば、余程のことがない限り、拒まないことをご存じであるはずなのに」

「……直球で言っても、きつときみは断るんだろうなと」

「当たり前です！」

「きみのほうこそ、言ってることが矛盾してないか？」

仕返しのつもりで先ほど彼女が自分に投げた疑問を口にする、今度は彼女がわたしの腕を引き寄せ気持ち上目遣いでわたしを見上げた。時々彼女がやる仕草なのだが、いまだにそれが無意識からなのか計算からなのかが分からない。

「あなたが、一度振られたらあきらめてしまつような柔な男だとは思いませんでした」

さらりと言われた中身を理解すると、上手いように彼女の掌の上で転がされていたような錯覚を覚えた。いや、彼女自身、そのようなことは微塵も考えてはいないだろう。この手のことは、彼女よりも私のほうが良く使う手法なのでなおさら。ただ、わたしが彼女の扱いに長けていると同時に、彼女もまた誰よりもわたしの扱いに長けている。そのことに思い至つたわたしは小さく吹き出し、彼女が油断したすぎに彼女を引っ張り、何も置かれていない執務用の机の上に彼女の半身を強引に乗せる。彼女の口から非難の声を聞く前に、彼女の唇をふさぎ、呼吸のためにもがく合間にささやく。

「言ったからには、きみを徹底的に落とすよ」

「……やれるものならば、どうぞぞ？」

またしても彼女にしては珍しい挑発的な言葉。嗚呼本当に。最初

のしおれた彼女はどこへと消えたのだ。

「とうとう、あなたに捨てられるのかと思ったからですよ」

「それは心外だな。わたしはきみなしでは生きてけないのに」

「あら、それ。言う相手が間違っておりませんか？」

「……あの、ね。わたしは何度、きみに同じことを伝えればきみは信じてくれるんだい？」

「信じてますよ？ 初めて出会ったときからずっと」

声の調子が変わったことに驚き、わたしは彼女を見下ろした。

まだ世界を知らなかったころ、無邪気に日々を過ごしてきたころの響きが、今の彼女の声色にあった。遠い遠い、昔のことだ。下からわたしを見るそのつり上がった瞳も、かつて、わたしが初めて実践する錬金術を遠目から眺めていたときと同じ、期待一杯の色に染まっている。

どれほど年を重ねようとも、彼女の底辺は何一つ変わってはいないことを改めて思い知る。それは、彼女の原動力は、彼女の世界の中心は、常にわたしなのだと言う不変の事実。

何も知らなかった少女は、今もなお当時のままの振りを続け、わたしに自分のすべてを託すのだ。

「だって、あなたは、この国を変えて下さるんでしょう？」

数か月後。年齢を理由に、自ら大總統の地位を下りたグラマン大總統閣下は、次期大總統にマスタングの名を挙げた。正式に辞令を受け取った彼とその部下たちの生活は、中央への引越と昇進の

ために急遽慌ただしいものに変化することとなった。

そしてさらに月日は流れ、いよいよ引き継ぎの日。民衆の前へと姿を現したマスタングは、一人の女性を傍らに連れていた。相手は言わずもがな、長年彼の補佐官を務めてきたホークアイだ。

常ならば、彼の斜め後ろで静かに控えている彼女はこの日、軍服ではなく上品な服装に身を包み、彼の傍ら　本来ならば大総統夫人が立つその位置で、終始穏やかな笑みを浮かべていた。彼女はその日、今まで就いていた補佐官の地位に次いで、マスタングの内縁の妻と言う立場を手に入れたのだ。しかし、彼女は大統領に与えられる邸宅に移り住むことはなく、以降はどちらかが互いの家を行き来する様子が頻繁に市民に目撃されたと言う。そして彼は、公の場では常に彼女を配偶者として伴うこととなる。

アメストリス民主化への足掛かりを築いたマスタング。人生の大半をイシユヴァール政策に注ぎ込んだと言う彼の功績は、後の世でも高い評価を得、今や歴史にその名を残す存在となっている。

「いつか、きみと睦言をささやき合いたいものだな」

「なら、どちらかの死に際にでもささやき合いましょうか」

(後書き)

ここまでお読み頂き、有り難う御座います。

身近な人間たちには既に夫婦と扱われていても、世間では上司と部下の関係で終わってしまう、それが嫌だ、と言う気持ちが最初でした。

無論、このまま上司と部下の関係のままで終わる、と言うこともないわけではありません。

しかし、少しは夢を見ても構わないだろうか、と言う思いがわたしの中ではありました。

その結果が、この作品です。

作品は一応、「【固い覚悟と小さな願い、そして、叶えてはならない夢】」から数年後と言う設定にしておりますが、そのときと食い違う場面があるかと思えます。

ですので、もしも、と言う言葉を前提の上でこの作品をお楽しみ頂ければ幸いです。

では、これにて失礼させて頂きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9937t/>

【矛盾と矛盾を重ねた先】

2011年10月5日21時49分発行